

宗教改革とエリザベス朝演劇の女性たちの近代化

馬場崎 賢 太

(受付 2020年10月30日)

序

イギリス・ルネサンスという時代を広くとらえると、ヘンリー八世の時代からピューリタン革命までを指すものと考えるのが一般的だろう。中世と近代の狭間に位置するこの時代は、あらゆる価値観の変遷期であり、社会に従来の価値観と新しい価値観が共存するという矛盾を抱えた時代だった。イギリス・ルネサンス期の特異な社会的価値観が誕生した背景のひとつとして、英国の宗教改革の歴史がある。

ヘンリー八世の時代に英国はカトリック教会から離脱し、1534年に国王を首長とするイングランド独自の教会を設立した。ここで設立されたイギリス国教会はプロテスタントともカトリックとも断定できないものだった¹。この時代には教義の変更はほとんど見られず、国教会のプロテスタント化が進展したのは次のエドワード六世の時代だった。しかし、彼の後にイングランド初の女性君主として即位したメアリー一世はカトリック教会への復帰を図った。メアリー一世の病没後、女王に即位したエリザベス一世はこれまでの宗教問題を解決する必要があった。エリザベス一世は、メアリー一世のカトリック復活政策を廃止し、再びプロテスタントの国教会設立に方針を転換した。エリザベス一世の時代のイギリス国教会は特異な性格をもっていた。古くからのカトリックの教えが国民に浸透している一方、徹底的なプロテスタント改革を志向するピューリタンも動き始めていた時代だった²。エリザベス一世の政策は国教会をよりプロテスタント化する方向にあったが、広範囲の信徒を考慮した穏健なものであった³。エリザベス一世はカトリックとピューリタンの両者を抑えながら、イギリス国教会の体制を定着させようとし、教義的にはプロテスタント、礼拝様式ではカトリックともいえ

- 1 ヘンリー八世の時代のイギリス国教会がカトリックともプロテスタントとも言えないものであったことは、1536年に定められた最初の信仰箇条である「十ヶ条」、そして1537年に出された「主教の書」においてその教義があいまいであったことからうかがえる。その原因はイングランドの教会の在り方、外交、そして政治権力をめぐる対立にあった。(今井 51)
- 2 ピューリタンという名称はもともとカルヴァン主義の影響を受けたプロテスタントたちの俗称であり、一義的な定義は困難であるが、本論ではエリザベス一世による穏健主義のプロテスタント体制に不満をもち、徹底した宗教改革を求める思想をもつ信者という意味で使っている。
- 3 エリザベス一世が、自らの称号を「首長」から「統治者」に置き換えたのも、保守派が受け入れやすい国教会の体制を整えるためであった。(今井 70)

るような妥協案を実行した。(石井 250) 1603年にジェームズ一世が即位し、王位は神によって定められたものであるという王権神授説を強調し、その姿勢は彼の息子チャールズ一世にも受け継がれ、国王の権力の制限を画策する議会との軋轢が強まっていった。チャールズ一世がスコットランドにも国教会制度を導入しようとする、プロテスタント色の強い議会の反乱を招き、ついにはピューリタン革命が起こることになった。

揺れ動いた宗教政策は、この時代の人々の生活に大きな価値観の変容を促した。その中でも重要なものの一つとして女性の自己認識の変化が挙げられる。伝統的なカトリックの教義では、聖母マリアを賛美し、「貞節」・「寡黙」・「従順」を女性の美德として掲げた。その理想化された女性像は「言葉」と「意志」をもつことが許されず、家父長制・封建制の枠組みの中で、父や夫への服従が強要された。家長への服従は、国王、そして神への服従と同一視される時代だった。そんなカトリック社会の中にプロテスタンティズムが流入し、男性と女性の互いの友愛による結婚が認められるようになり、女性は自らの「意志」と「言葉」をもち始める。また、英国の中でピューリタニズムの価値観が広まると、女性の自己認識の変化はさらに加速する。聖書と個人の直接の関係を最重要視するピューリタニズムの台頭は、家父長の意志を飛び越えて、自ら考え自ら語る女性の登場へとつながる。女性の「個」としての意識の芽生えは近代化する社会の象徴である。

本論は、エリザベス朝演劇の中に描かれる女性たちの描写から、女性の自己認識が変化する様を英国の宗教改革の歴史と関連づけて考察するものである。第一節において、中世から続く伝統的なカトリック社会の中での女性の立場を確認し、第二節でプロテスタントの価値観の流入による女性観の変化、そして第三節で、プロテスタントの中でも特にピューリタニズムの価値観に着目した女性の自己認識について考察する。

1. カトリシズム、家父長制における女性観

中世から続く、カトリックの伝統的女性観では、聖母マリアを重要視し、「貞節」を女性の美德として賛美し、禁欲主義を称えた。(Eales 10) 禁欲を尊ぶ伝統的なカトリシズムは、男女の愛情の成就としての結婚に否定的だった。カトリシズムが重んじる「女性の貞節」の概念には「従順」、「寡黙」という性質が付随した。つまり、自らの「意志」と「言葉」をもたないことがカトリシズムにおける理想的な女性像の条件だったと言える。そういう意味で『ハムレット』(*Hamlet*, 1601) のオフィーリアはカトリック的価値観の中にいる女性である。彼女はハムレットとの関係を断つように父から命じられると、たとえそれが自分の思いとは異なる命令であっても 'I shall obey, my lord'. (1.3.136) と答える。そして、オフィーリアは実際に父や兄の言いつけ通りにハムレットからの手紙を返し、彼との関係を断とうとしていた。

自分の本当の気持ちを言葉にせず、父と兄の意向に従順なオフィーリアはカトリシズムの説く女性の美德を体現している。また、3幕1場で、ハムレットは自分を裏切ったオフィーリアに向かって‘Get thee to a nunnery’ (3.1.120) と言って非難するが「修道院 (nunnery)」という言葉にもカトリック的価値観が付与されている。

「寡黙」と「従順」を女性に強要するカトリックの価値観は家父長制という男性優位主義を強固なものにした。家父長制は、ルネサンス期のイングランド社会における重要な特徴のひとつである。それは、家庭内における父親の絶対的な支配体制であり、女性や子どもは父親の「財産」あるいは「所有物」とさえ見なされていた。(Fletcher xv)

『オセロー』(Othello, 1603-04)の開幕直後、デズデモーナとオセローの駆け落ちは‘thieves’と表現され、また、デズデモーナは父ブラバンショアの‘bags’と同列に扱われる。彼女は父親の所有物であり、財産である娘が勝手に盗まれたという家父長制の概念を端的に表す台詞である。

IAGO. Awake! What ho, Brabantio! Thieves, thieves!
Look to your house, your daughter, and your bags!
Thieves, thieves! (Othello, 1.1.79-81)

同様に、『ロミオとジュリエット』(Romeo and Juliet, 1595)のジュリエットもまた父から‘young baggage’ (3.5.160)と非難される。中世的な価値観の枠組みの中では、「娘」は父親にとっての「所有物」という位置づけだった。

男性による女性支配の構造は、家庭内だけにとどまらず、国家の支配体系として、政治的・宗教的にも利用されていた。父親と妻・娘との主従関係は、国王と国民の主従関係、そして、神と人間の主従関係とのアナロジーで考えられていた。(Wells 6)

家長への従順を、神、そして国王に対する従順と同一視する価値観は、『じゃじゃ馬慣らし』(The Taming of the Shrew, 1590-94)のカタリーナの最後のスピーチによって語られる。

KATHERINA. Thy husband is thy lord, thy life, thy keeper,
Thy head, thy sovereign; [...]
Such duty as the subject owes the prince
Even such a woman oweth to her husband.
(The Taming of the Shrew, 5.2.146-156)

これは、当時説教に頻繁に用いられていた聖書の「エフェソ信徒への手紙」(第 5 章 22-23 節)に依拠している。(Morris 146)

‘Wives, submit yourselves unto your own husbands, as unto the Lord. For the husband is the head of the wife, even as Christ is the head of the church.’ (Ephesians, v.22-23)

家族は社会構造の中で重要な最小単位とみなされ、家族内では家長が君主、そして神と同じ役割を果たすとされた。結婚に関しても家長の権力は大きかった。娘の結婚の際に考慮すべきことは当人の意志や感情ではなく、政治的な後援の確保、縁故関係の拡大、財産の保護などであった。(Stone 110) そのために発達したのが結婚に伴う持参金制度である。持参金に関する絶対的権限も父親が握っていた。中世的な価値観の中では、結婚は持参金の取引によって行われる経済的、社会的契約であり、当人の意見はほとんど考慮されることなく、両親や親族によって決定されていた。この意味において、結婚は、家の繁栄がその主たる目的であり、結婚によって個人と個人の愛情を期待することは無意味だった。(Stone 70-81)

シェイクスピア作品において家父長の娘に対する支配力を見ることができる作品は多数存在する。『じゃじゃ馬慣らし』の第 2 幕では、カタリーナの結婚は、父バプティスタと婿ペトルーキオの持参金の交渉だけで成立してしまう。

PETRUCHIO. Then tell me, if I get your daughter's love,

What dowry shall I have with her to wife?

BAPTISTA. After my death, the one half of my lands

And, in possession, twenty thousand crowns.

PETRUCHIO. And for that dowry, I'll assure her of

Her widowhood, be it that she survive me,

In all my lands and leases whatsoever.

Let specialities be therefore drawn between us,

That covenants may be kept on either hand.

(*The Taming of the Shrew*, 2.1.119-127)

『リア王』(*King Lear*, 1605-06) では、リアは末娘コーデリアに腹を立て彼女に持参金を与えないことを告げ、娘の求婚者たちに「もはや彼女の価値は下がった」ことを伝える。(“But now her price is fallen.” 1.1.197) 求婚者の一人であるバーガンディ公はリアにコーデ

リアの持参金の交渉をするが、リアに断られると即座に結婚の申し出を取り下げる。

BURGUNDY. I am sorry, then, you have so lost a father

That you must lose a husband.

(*King Lear*, 1.1.246-7)

娘にとって、父からの持参金を失うことは結婚の機会を失うことと同義であり、娘たちは男性に人生を支配される宿命を背負っていた。

娘たちが家父長に反抗することは「不自然な (“unnatural”）」ことと見なされた。(Eales 5) 『オセロー』のデズデモーナは、自分の意志で夫を選んだが、家父長制の論理の中では、デズデモーナの結婚は、「自然の掟 (“all rules of nature” 1.3.101)」に反する行為、「反逆 (“gross revolt” 1.1.134)」,そして「不自然 (“unnatural” 3.3.237)」と男性登場人物たちに非難される。

「従順」,「寡黙」という性質に「貞節」という美德を見出す中世的な価値観の中で、口数が多く男性に逆らう女性は ‘scold’ (口やかましい女), ‘whore’ (娼婦), ‘witch’ (魔女) などと呼ばれ、男性社会に対する脅威とみなされた。(Mendelson 65)

『じゃじゃ馬ならし』のカタリーナは男たちから繰り返し「悪魔」(‘Why, she’s a devil, a devil, the devil’s dam.’ 3.2.154)と罵られ、デズデモーナは、「娼婦」(‘whore’ 4.2.74)というレッテルを貼られる。また、『冬物語』(*The Winter’s Tale*, 1609-10)のハーマイオニーは、その弁舌ゆえに不倫の罪を不当に着せられ、‘a hobby-horse’ (1.2.318), ‘an adulteress’ (2.1.94)と罵倒される。

これらの男性優位社会に対する脅威とみなされた女性たちに対する暴力的な制裁の習慣が当時存在した。沈黙を破る饒舌な女性たちは ‘cucking stool’ という椅子に縛り付けられ、川や池に繰り返し沈められた。また、‘scold’s bridle’ という鉄の口輪を頭から被せて女性の舌を押さえつけ、公衆の面前でさらし者にする事もあった。(Mendelson 70)

『じゃじゃ馬ならし』で、ペトルーキオが「じゃじゃ馬」カタリーナに対し、眠ることも食べることも許さないという暴力的な「ならし」を実行する背景には、女性の「言葉」を暴力で抑圧しようとする社会の風潮があったのだろう。また、『オセロー』で、言葉で父ブランバンシオーの意志を覆したデズデモーナが「扼殺」という手段で殺されることも象徴的である。‘scold’s bridle’ が物理的に女性の舌を押さえつけたように、デズデモーナは喉(声帯)を物理的に握りつぶされ、言葉(声)を奪われる⁴。

4 「扼殺」という象徴的な手段で殺害される女性主人公としては、ウェブスター作『モルフィ公爵夫人』(*The Duchess of Malfi*, 1614)の公爵夫人も挙げられる。家長ファーディナンドに逆らって自らの意志で結婚した公爵夫人は、牢獄の中で多数の男たちに首を絞められ、言葉を封じられる。

OTHELLO. Be thus, when thou are dead, and I will kill thee,
And love thee after.

(*Othello*, 5.2.18-19)

死体となり意志も言葉も失ったデズデモーナしか愛せないというオセローの倒錯した愛情はこの時代の矛盾を象徴している⁵。女性が言葉も意志も持つことを許さないカトリシズムとそれによって強化される家父長制において、男女の愛情は常に矛盾をはらんでいた。

2. プロテスタンティズムにおける結婚観

カトリシズム、そして、家父長制の枠組みにおいては、女性が男性の意志に反して自己主張をすることは制裁の対象であった。しかしながら、エリザベス朝の演劇の中では「結婚」をテーマとするものが多く、その中で「娘」たちの自己主張にはある種の説得力があり、彼女らへの共感・同情を前提とした作劇がなされていることは否定できない。それは当時のイングランドの宗教改革により、プロテスタント的な結婚観が受け入れられ始めていたことを示唆している。

禁欲を重んじるカトリックの教義においては、結婚よりも独身主義が強調されたが、プロテスタントの教義では、むしろ婚姻関係は禁欲的な独身状態よりも「自然 ('natural')」なものとして尊重されるようになり、夫と妻の互いの愛情によって結婚を成立させることが推奨された。(Dusinberre 43)

しかし、この過渡期においては従来の結婚観もまた存在しており、その概念は明らかな矛盾を孕んでいた。父の意志に反する結婚は、伝統的な家父長制の価値観では「不自然 (unnatural)」であり、プロテスタンティズムの価値観では「自然 (natural)」であるという矛盾である。

シェイクスピアが作品を書いたのはまさにこの時期であり、彼の喜劇作品の多くは恋愛の成就を結婚で締めくくるという構造をもつ。プロテスタンティズムの教義によって、愛の帰結としての結婚という概念が導入され、娘たちは、家父長制のもとで抑圧されながらも自己の望む相手との結婚を希望するという葛藤を抱えることになる。

『ヴェニスの商人』(*The Merchant of Venice*, 1596) の中で、父の意向によって自分で結婚相手を選ぶことができないポーシャは次のように嘆く。

5 グリーンブラッドは、家父長制における愛情の矛盾が生み出したオセローの倒錯した性愛を「屍体愛」(necrophilic fantasy) と評する。(252) また、『冬物語』(*The Winter's Tale*, 1609-10) の最終場面で、豊かな弁舌が特徴であったハーマイオニーが物言わぬ「彫像」として再登場することも、男性優位主義による女性の言葉の抑圧の象徴と考えられる。(Traub 28)

PORTIA. O me, the word 'choose'! I may neither choose who I would nor refuse who I dislike; so is the will of a living daughter curb'd by the will of a dead father. Is it not hard, Nerissa, that I cannot choose one, nor refuse none?

(*The Merchant of Venice*, 1.2.20-23)

また、『ロミオとジュリエット』のジュリエットは、家名よりも個人としての意志を重んじ、家柄の維持のための道具としての伝統的な結婚観を否定する。

JULIET. 'Tis but thy name that is my enemy;
Thou art thyself, though not a Montague.
What's Montague? It is nor hand, nor foot,
Nor arm, nor face, nor any other part
Belonging to a man. O, be some other name! (*Romeo and Juliet*, 2.2.38-42)

ジュリエットやポーシャの苦悩はこの時代の矛盾に起因するものである。父親の意志と娘の意志が一致しない場合、女性たちは愛情の対象としての「夫」と家父長制における支配者である「父」との間で引き裂かれることになる。

当人同士の意志による「幸せな結婚」という大団円は、シェイクスピアの喜劇に多く用いられた。それはプロテスタンティズムの新しい結婚観を反映していると言えるが、その多くは「父の意志への服従」という旧来の価値観と、「個人の愛情」という新しい価値観を融合させるという（ある意味で都合の良い）手法で描かれる。父の遺言と自分の意志との葛藤に悩むポーシャの場合、自分が望む相手が父の遺言通りの男性であるという結果を得て、父と娘の意志は同一化する。

また、『あらし』(*The Tempest*, 1610-11)におけるミランダとファーディナンドの結婚は、父プロスペローにとっても「喜び」として描かれる。ここに父と娘の対立構造は成立しない。(森本 74-75)

PROSPERO. So glad of this as they I cannot be,
Who are surpris'd withal; but my rejoicing
At nothing can be more. (*The Tempest*, 3.1.92-94)

『オセロー』で、デズデモーナとオセローの結婚に憤慨していたブラバンショーさえも、デズデモーナ自身に結婚の意志がある場合はその意志を尊重することを公言している。

(1.3.176-8) そして、オセローとの結婚が、デズデモーナ自身の言葉で、当人同士が望んでいたものであると語られるとその結婚を認めざるをえない。

DESDEMONA. My noble father,
I do perceive here a divided duty:
To you I am bound for life and education,
My life and education both do learn me
How to respect you, you are lord of all my duty,
I am hitherto your daughter: but here's my husband:
And so much duty as my mother show'd
To you, preferring you before her father,
So much I challenge, that I may profess,
Due to the Moor my lord. (Othello, 1.3.180-189)

デズデモーナが語る 'divided duty' は新旧の価値観の葛藤であり、デズデモーナは言葉を用いて個人としての意志を伝え、父親の意向を覆し、家父長制の論理に勝利する。自らの意志を貫くデズデモーナ、そして、それを認めるブラバンシヨアの姿はプロテスタントの結婚観に基づいたものである。しかし、ブラバンシヨアのオセローへの警告の言葉 ('Look to her, Moor, have a quick eye to see: / She has deceiv'd her father, may do thee.' 1.3.292-3) は、劇全体を通して消えることのない旧価値観の影として残り続け、その矛盾が悲劇を引き起こすことになる。(Rose 218)

3. ピューリタニズムの影響

エリザベス一世によって再構築されたイギリス国教会にとって、警戒すべき存在がピューリタンたちであった。エリザベス一世の中道的プロテスタント政策に不満をもち、より徹底的な宗教改革を願うピューリタンたちは、反体制の要素を強くもっていた。ピューリタニズムと当時の社会体制との対立は、演劇におけるピューリタンの人物の描写にも表れており、ピューリタンは風刺・揶揄の対象として描かれ攻撃の対象となった⁶。

6 シェイクスピアの作品では『終わりよければすべてよし』(All's Well That Ends Well, 1606-07)、『ペリクリーズ』(Pericles, 1607)、『十二夜』(The Twelfth Night, 1601) の3作品に合計7回 'puritan' という語が使用されている。これらはすべてピューリタンに対する否定的なイメージを付与して用いられており、当時の社会体制とピューリタニズムの敵対関係を読み取ることができる。印象的な人物としては『十二夜』のマルヴォーリオである。彼は他の登場人物らから徹底的な攻撃を受け、劇世界から排除されたまま幕が閉じる。

ピューリタニズムは、聖書の言葉を重要視し、個人と神の直接的な関係を強調した。それは女性の自己認識の形成に大きな影響を与え、論理的にものを考え、自分の見解を雄弁に語る女性を社会に輩出することになった。(楠 258) また、急進的な「セクト」と呼ばれる教派では、夫の命令が聖書の教えに背く場合や夫が敬虔なクリスチャンでない場合は、妻は夫に従う義務はないとさえ教えた。(246) 女性自身もまた、社会が掲げる女性像と現実の間のギャップを認識しはじめ、その矛盾に対する不満を行動で表すようになっていた。

女性の自己主張が強くなった現象の背景には、経済的な変化も挙げられる。個人の意志と才能を発揮することを善とするピューリタニズムは、自らの力量によって自由に富を獲得することができるという個人主義を発展させた。この時代、酪農業や繊維業でギルド組合の正式メンバーになり、経済的に自立できる女性も現れた。(Orgel 72-4)

ピューリタニズムが影響を与えた女性像の一例を『オセロー』のエミリアに見ることができる。

IAGO. What, are you mad? I charge you get you home.

EMILIA. Good gentlemen, let me have leave to speak.

'Tis proper I obey him, but not now.

Perchance, Iago, I will ne'er go home. (Othello, 5.2.193-196)

IAGO. Zounds, hold your peace!

EMILIA. 'Twill out, 'twill out. I peace!

No, I will speak as liberal as the north;

Let heaven, and men, and devils, let them all,

All, all cry shame against me, yet I'll speak.

IAGO. Be wise and get you home.

EMILIA. I will not. (Othello, 5.2.217-221)

エミリアは、夫イアゴーに従うことが適切だと知りつつも、夫に逆らい、「沈黙」を拒絶する。「神」(heaven)も「人(または男性)」(men)も、「悪魔」(devils)も彼女の言葉を止めることはできないと彼女は述べる。この場面において、男性優位の社会通念に逆らい非難されるエミリアだけが真実を語り、正義を貫く人物として描かれる。父や夫といった男性への服従を通して、国王・神への「従順」を示すことが善とされた中世的価値観はそこにはなく、個人の良心に基づいて正義を実行する女性が登場した時代を映し出している。

また、デズデモーナが、どんな物が報酬であってもオセローへの愛情を裏切ることはでき

ないと言うのに対し、エミリアは、全世界と引き換えであればいつでも夫を裏切り、不貞をはたらけると言う。(4.3.57-73) エミリアの全世界という例えには、家父長制社会の中で見下され、抑圧された女性の主体的自由への願望が見て取れるだろう。妻として従順に生きながらも、その立場に納得しきれないエミリアは、夫への不満をデズデモーナに吐露する。

EMILIA. But I do think it is their husbands' faults

If wives do fall. Say that slack their duties

And pour our treasures into foreign laps,

Or else break out in peevish jealousies,

Throwing restraint upon us; or say they strike us,

Or scant our former having in despite –

Why, we have galls, and though we have some grace,

Yet have we some revenge. Let husbands know

Their wives have sense like them: they see, and smell,

And have their palates both for sweet and sour

As husbands have. […]]

And have not we affections,

Desires for sport, and frailty, as men have?

Then let them use us well; else let them know

The ills we do, their ills instruct us so.

(*Othello*, 4.3.86-103)

ここでエミリアは、女性への不当な扱いを指摘し、女性も男性と対等な立場を与えられるべきだという新しい時代の価値観を披露する。彼女は、不実な妻がいたならばそれは夫が原因であると言い、夫の浮気には妻の浮気で復讐してやるのだと述べる⁷。デズデモーナは、個人としての愛情で家父長制を逸脱して主体性を獲得したのに対し、エミリアは、抑圧され差別される女性として、男性と同じ悪事をおかすことで男性と同等の権利を主張し、家父長制から脱け出したいと願うのである⁸。

7 エミリアのこの台詞は、1622年のクォート版には記載されておらず、翌年に出版された第一フォリオには記載されている。その理由は明らかではないが、マッケヴォイはエミリアの言葉がもつ近代性が論争を呼ぶ性質のものであったことと関連があるのではないかと推測する。(235)

8 この場のエミリアの台詞は、『ヴェニス商人』のシャイロックの台詞 (‘I am a Jew. Hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions; fed with the same food… as a Christian is?’ 3.1.46-50) との類似が指摘される。(Sanders 175) キリスト教社会で迫害されるユダヤ人シャイロックの苦しみは、家父長制社会で抑圧される女性の苦しみと同じ種のものである。

この時代の結婚観の変化は、演劇の流行をも変化させた。ジェイムズ朝以降、英国では「家庭悲劇」と呼ばれる演劇が流行する。それまでの伝統的な悲劇では、国の興亡にかかわる王侯貴族が描かれていたのに対し、不倫を主題とする、家庭内の悲劇が人気を集めるようになった。女性の自己認識の変化が起こり、彼女たちは自己実現の欲求を伝統的な結婚の枠内で考えなくなっていた。ルネサンス期の英国社会では社会秩序の基盤を担うのは家庭であったから、女性の不倫は個人のレベルを超えて社会問題に発展する可能性があった。

ピューリタニズムが引き起こした女性の個人としての意識は、一方で演劇の中に悪女を作り出した。この時期には妻の夫殺しを中心に扱った戯曲が多く書かれている。とりわけ、女性の自己認識についての問題を安易な倫理観に頼らず深く探求しているウェブスターの作品は、この時代の葛藤を描き出しており、『白い悪魔』(*The White Devil*, 1612) はイギリス演劇の中の女性像の転換点ともいえる作品である。タイトルそのものが矛盾をはらんでいるこの作品は、悪女ヴィットリアを観客の共感の対象とし、その自己主張にある種の説得力をもたせ、彼女を悪と断定する劇世界の倫理に疑問を投げかける。

VITTORIA. Ha? Whore? What's that?

MONTICELSO. Shall I expound whore to you? Sure I shall,

I'll give their perfect character. They are first,
Sweet-meats which rot the eater; in man's nostril
Poisoned perfumes. They are cozening alchemy,
Shipwrecks in calmest weather! What are whores?
Cold Russian winters, that appear so barren,
As if that nature had forgot the spring.
They are the true material fire of hell,
Worse than those tributes i'th' Low Countries paid,
Exactions upon meat, drink, garments, sleep;
Ay, even on man's perdition, his sin.
[...]

VITTORIA. This character scapes me.

(*The White Devil*, 3.2.77-101)

枢機卿モンティセルソは、ヴィットリアを夫殺害の容疑で裁判にかけ、'whore' と糾弾するが、社会規範を象徴するモンティセルソの取り乱した様子に対し、ヴィットリアは毅然と「自分は娼婦にはあてはまらない」と答える。家父長制の論理がヴィットリアを 'whore' と定義したとしても、彼女は自分の判断によってそれを否定する。観客の共感には常にヴィットリア

を支持し、彼女に勝利を与えている。デズデモーナは「娼婦」と呼ばれて、‘Alas, what ignorant sin have I committed?’ (4.2.72) と言うことしかできなかった。従来の家父長制の秩序の中では「娼婦」のレッテルは本人ではなく、男性が一方的に与えるものであり、本人に自覚がなくとも男性からそう呼ばれたらその罪は否定することができなかったのだが、ヴィットリアは、男性から与えられた「娼婦」の呼び名を自らの判断で否定する。社会規範を超越する個人の意志を表明するヴィットリアに新しい時代の女性像をみることができる。

結

ヘンリー八世の時代に端を発したイングランドの宗教改革は、ルネサンス期の英国の宗教観を大きく揺さぶった。伝統的なカトリシズムの価値観が根付いている中に徐々にプロテスタント主義の教義が導入されてゆき、やがて徹底的なプロテスタント化を目指すピューリタニズムが勢力を増していく。宗教観の揺らぎは社会の中の女性の自己認識の変化を促した。

カトリシズムにおいては、個人としての意志や言葉を持たないことが理想的な「貞節な女性」の条件であり、その社会規範から逸脱する女性は制裁の対象であった。意志と言葉を抑圧された女性像はオフィーリアなどの描写に象徴される。プロテスタント主義の導入により、女性は自らの意志によって結婚相手を選ぶという願望をもつようになった。それは封建的な「家」に縛られない「個」としての近代的な自我の萌芽である。この社会的文脈において、恋愛の成就として「結婚」が成立する喜劇が数多く書かれたことの意味は大きい。エリザベス一世によって進められた緩やかなプロテスタント政策に対する不満は、やがてピューリタニズムという潮流を生み出した。ピューリタニズムは女性の自意識を確立し、男性に依存しない自己をもった女性の出現へとつながった。家父長制の抑圧から自らを解放し、自らの意志で言葉を発する女性である。また、ジェイムズ朝悲劇においては、伝統的な社会規範からの逸脱を恐れず自己の意志と言葉をもった女性たちは演劇の中でしばしば悪女としても描かれた。この時代の女性に芽生えた「個」としての自我は演劇の中で共感の対象として描かれる一方で、近代的な女性たちを抑圧しようとする中世的な価値観も存在していたことも事実である。自己を主張した新しい時代の女性たちが演劇の中で男性登場人物による「制裁」を受けなければならないのは、この矛盾を孕んだ時代の限界でもあったとも言えるだろう。

テ ク ス ト

Evans, G. Blakemore, Ed. *The Riverside Shakespeare*. 2nd ed. Boston: Huston Mifflin Company, 1997. Print.
Webster, John. *The Duchess of Malfi and Other Plays*. Ed. Rene Weis. Oxford: Oxford UP, 1996. Print.

文 献 — 覧

- Dusinberre, Juliet. *Shakespeare and the Nature of Women*. 2nd ed. London: Macmillan, 1996. Print.
- Eales, Jaqueline. *Women in Early Modern England, 1500–1700*, London: UCL, 1998. Print.
- Fletcher, Anthony. *Gender, Sex, and Subordination in England 1500–1800*, New haven and London: Yale UP, 1995. Print.
- Greenblatt, Stephen. *Renaissance Self-Fashioning From More to Shakespeare*, Chicago UP, 1980. Print.
- Mendelson, Sala and Carwford, Patricia. *Women in Early Modern England*, Oxford:Clarendon, 1998. Print.
- McEvoy, Sean. *Shakespeare: The Basics*. London: Routledge, 2006. Print.
- Morris, Brian. *The Taming of the Shrew, The Arden Shakespeare*, London: 1981. Print.
- Orgel, Stephen. *Impersonations: The performance of gender in Shakespeare's England*, Cambridge UP, 1996. Print.
- Rose, Mary Beth. "The Heroics of Marriage in *Othello* and *the Duchess of Malfi*," *Shakespearean Tragedy and Gender*, Ed. Shirley Nelson Garner an Madelon Sprengnether. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1996. Print.
- Sanders, Norman. *Othello*, Cambridge: Cambridge UP, 2003. Print.
- Schochet, Gordon. *Patriarchalism in Political Thought: The Authoritarian Family and Political Speculation and Attitudes, Especially in Seventeenth-Century England*, Oxford: Basil Blackwell, 1975. Print.
- Stone, Laurence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500–1800*, Abridged ed. New York: Harper & Row, 1979. Print.
- Traub, Valerie. *Desire and Anxiety: Circulations of Sexuality in Shakespearean Drama*. London: Routledge, 1992. Print.
- Wells, Robin Headlam. *Shakespeare, Politics and the State*, London: Macmillan, 1986. Print.
- 石井美樹子『エリザベス——華麗なる孤独』中央公論新社, 2009. Print.
- 今井宏『イギリス史2——近世——』山川出版, 1996. Print.
- 楠明子『英国ルネサンスの女たち——シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』みすず書房, 1999. Print.
- 森本美樹『シェイクスピアの悲劇 オセロー——愛と旋律の不協和音——』文芸社, 2003. Print.
- 奈須麻里子「『冬物語』における女性の主体表象」, 星久美子・撫原華子・堀祐子・石渕理恵子(編)『シェイクスピア・プリズム 英国ルネサンスから現代へ』金星堂, 2003. Print.
- モートン, A.L.『イングランド人民の歴史』鈴木 亮・荒川邦彦・浜林正夫訳, 東京: 未来社, 1980. Print.

Summary

The English Reformation and the Modernization of the
Female Characters in the Elizabethan Drama

Kenta Babasaki

This study analyses the transformation of the view of women in the Elizabethan drama by relating it to the history of the English Reformation.

In England before the Reformation, the Catholic doctrine was deeply rooted in the society. In Catholicism, the Virgin Mary was worshipped as the ideal woman, and women were forced to be chaste, silent and obedient. This doctrine reinforced the patriarchal system. Women were not allowed to choose their own marriage partners but had to obey the orders of the patriarchs. Ophelia in *Hamlet* is a typical example of a woman who puts the orders of her father and brother before her own will.

In the course of the Reformation, however, as Protestantism was introduced in England, women's self-awareness was transformed. Individualism appeared in the early modern society, and women began to desire to choose their own partners, like Portia in *The Merchant of Venice* and Juliet in *Romeo and Juliet*. As a result of the spread of Protestantism, many comedies on the theme of love and marriage were written during this period.

Later, with the rise of Puritanism, women became more and more independent. Some women were willing to deviate from the traditional social norms in order to follow their own will. Emilia in *Othello* and Vittoria in *The White Devil* are the examples of the independent women who place their conscience and judgment above social norms.